

樹脂メーカーの大成ファインケミカル(千葉県旭市、稲生豊人社長)が体質強化に取り組んでいる。今年4月にグループ会社の大成E&Lを吸収合併し、工場環境商品や舗装材などの事業を引き継いだ。耐震構造を備える建屋へ研究設備の集約も進行中。今後は大がかりな再編計画が控えており、グループの核ぎ頭として存在感は一層高まる。開発と製造の中核である本社工場を訪ねた。

千葉県旭市のあさひ鎌 大成化工の樹脂製造拠点。数工業団地は旧海軍の航空基地を転用した施設で、滑走路の跡地を自動車ブレーキの実験に活用している企業もある。

この場所に大成ファンケミカルの本社工場が誕生したのは1991年。親会社の大成化工から分社化する以前のこと、

新管理棟に 開発機能さらに強化

体制強化に向け組織再編

大成ファインケミカル

ルポリマーの側鎖を別の樹脂でグラフト化するハイブリッド技術が強み。100人体制で細かい注文に応じる「ケミカル・オーダーメイド」への顧客の評価は高い。

2011年の東日本大震災では大きな被害に遭った。電力の供給が不安定になり、製造業にとっては苦渋の決断となる操業停止を余儀なくされた。稲生社長はこの時の体験から事業継続計画(BCP)の必要性を改めて痛感。緊急連絡体制の整備、データ管理の外



もるに6に 管理棟 新管 震度6 耐震

設備面で 大成といえるのが、鎌敷の敷地の中心に新設した管理棟だ。震度6にも耐える設計

部化、ウェブページでの稼働状況の公開など次々と改善策を打ち出した。2階建ての計画だった

が、震災を受けて予算増をいとわず3階建てに変更した。3階にはセミナー室や宿泊施設を配置。「従業員のほか、場合によってはその家族も宿泊までできる十分なスペースを確保した(稲生社長)。

大成ファインケミカルは、大成化工から分社化するかたちで2004年に発足。大成E&Lの吸収合併もあり、売上規模では親会社を上回っている。今後は大成化工の担当する塗料・インキ事業と、大成ファインケミカルの担当する樹脂事業の組織的連携も検討する。

東京の海抜ゼロメートル地帯に含まれる葛飾区の拠点から、少量試作プラントなどの移設を進めている。水害の恐れが皆無とはいえず、都心部の化学品の取り扱いには制約もある。葛飾は研究所・営業所として継続するものの、製造と直結した生産技術の主力は鎌敷が担うことになる。